

あ〈ア〉段

アイゼンク Eysenck, Hans Jurgen(1916～1997) ドイツの心理学者で、ロンドン大学教授。主要研究領域はパーソナリティーの実験的研究。因子分析に基づいて、①内向性－外向性②神経質傾向(不安定)－安定③精神病質という共通次元を確認し、このうち①②の2次元からなるモーズレイ人格目録をつくる。実験的方法を重視し、心理学を操作を伴う自然科学と考える。学習理論に基づく行動療法を提唱した。

青木昆陽(あおきこんよう) 1698(元禄11)～1769(明和6) 江戸時代中期の儒学者・蘭学者。幕府に登用されて書物奉行となった。京都で古学派の伊藤東涯(仁斎の子)に学び古義学の学風に触れた。朱子学の観念的な合理主義に批判的な古学派の思想は、実証的経験主義的な思考をうながすものとなった。吉宗の奨励によりオランダ語を学び蘭学発達の歩みを進めた。『和蘭文字略考』『和蘭文訳』などを著し、前野良沢に蘭学の手ほどきをした。また各地の古文書の調査も行い考証的な研究を行っている。備荒作物として甘藷に着目、栽培法を研究して『蕃講考』を書き、甘藷栽培を普及させ甘藷先生といわれる。

芦田恵之助(あしだえのすけ) 1873(明治6)～1951(昭和26) 教育者。東京高等師範学校附属小学校訓導。兵庫県に生まれた。大正期の作文教育において課題主義を排して自由選題主義を唱えた。これは1913(大正2)年に発行された『綴り方教授』の中で明らかにされたもので、従来の上からの教育勅語的な教化を使命とする日本の教育形式に対する批判の意味を持っており、児童の思考を束縛から解放して、自由な題材で自由な記述を行わせようとしたものである。彼はこの随意選題による作文の試みを1901(明治34)年に赴任した姫路中学校で実践して、和辻哲郎はその教えを受けた。彼は課題主義を主張する友納友次郎と論争を展開し、課題主義と自由選題主義作文には根本的な相違があるとしている。すなわち自分から発動してぜひ書こうという文章と、ほかから与えられてその中に自由を見いだすという文章とでは、文の本質上に差異があることを強調している。著『国語教育易行道』『恵雨自伝』。

アドラー Adler, Alfred(1870～1937) オーストリアの精神医学者・心理学者。フロイトおよびユングとともに精神分析を研究し、心理学を新しい観点から見直すことに貢献。フロイトの性愛説に対して、リビドーは権力への意志であり、劣等感を補償するために生じると仮定した。個人心理学を創始した。

アーノルド, M. Arnold, Matthew(1822～1888) T.アーノルドの息子で、ラグビー校、ウィンチェスター校を経て、オクスフォード大学を卒業、1845年にはオリエル・カレッジの校友になった。教育上彼の大きな業績は、1851～1886年教育局(文部省の前身)の視学官として各地の民衆用初等学校を視察して回り、その整備充実に尽力したことである。教員養成大学を視察しその報告書も出した。1859年、民衆教育の調査改善のために王立委員会(ニューカスル委員会)ができると、その補助委員になり大陸諸国の初等教育を視察。1864年、中等学校調査のためのタウントン委員会が設けられたときもその依頼で大陸の中等学校を視察した。

アーノルド, T. Arnold, Thomas(1795～1842) ウィンチェスター校を経て1811年オックスフォード大学にはいり、1815年オリエル・カレッジの校友になった。1818年から10年間教会執事の職にあったがその間に、以前の古典教養に加えて古代史を学習。1828年、ラグビー校の校長に就任し死ぬまでその職にあった。彼はこの学校で種々の改革をし、当代の名校長とうたわれた。名説教と高潔な人格で生徒を感化、監督生制度の活用により学校の秩序を回復、ドイツ新人文主義の影響をうけて古典語よりも古代精神を重視した。ラグビー校での彼の教育は、ヒューズによる『トム・ブラウンの学校生活』で紹介されている。

新井白石(あらいはくせき) 1657(明暦3)～1725(享保10) 江戸時代中期の朱子学者・政治家。名は君美、通称は勘解由、白石は号。1684(貞享1)年、朱子学者木下順庵に学び、室鳩巢らとともに木門の五先生と称された。1693(元禄6)年、順庵の推薦により甲府藩主徳川綱豊の儒臣となり、1709(宝永6)年、綱豊が六代將軍家宣になると、その侍講・政治補佐役となり文治主義政治を進めた。朱子学のほかに歴史・地理・言語学にも造詣が深く著書も多い。朱子学の合理主義的・実証主義的側